

保育事例紹介～「科学する心」を育てる～

影との出会い／国立大学法人 山梨大学教育学部附属幼稚園（山梨県）

子どもが自然の事象や現象に興味・関心を示している場面に出合った時、どのような関わりをしていますか？

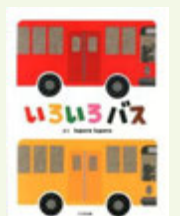
今回は、影と出合った子どもたちの姿を丁寧に受け止め、保育者自身も子どもの気持ちになり共に遊びを楽しみながら、興味に添った援助や環境の工夫につなげている事例をご紹介します。絵本が、子どもたちの興味・関心を広げていく役割の一つとなっていることも読み取れます。



○ 「影ってなあに？」～影と出合った3歳児～／3歳児

✦ 5月中旬

- 5歳児がカラーポリロールのマントを身に付けている姿を見て、3歳児も同じようにしてみたくなった。一人が付け始めると、「私も！」「僕も！」とマントマン（マントを付けたいろいろな登場人物）だらけになった。
- マントを付け、スーパーマンになった子どもたちは普段よりも少し“大きな自分”になれるようで、高いところに登ることに挑戦したり、ジャンプしたりしながら、「見て！できた！」と言い、喜んで遊んでいた。
- Aちゃんが、スーパーマンになりきり、両手を突き上げ「ヤー」と全力で走り出した。保育者も、負けじとAちゃんと同じように、「ヤー」と走って受け止めた。すると、周りにいた子どもたちも、「ヤー」と走り出し、気づくと園庭では、たくさんのスーパーマンたちが走っていた。
- 翌週も引き続き、子どもたちは、カラーポリロールのマントを付けスーパーマンに変身していた。この日は、青いマントを付けて走っていたBちゃんが、太陽の光に透ける影を見て「先生、（地面が）青くなってる！」と、突然驚いた声を出した。
- 子どもたちのマントの下を見ると、Aちゃんは黄色、Cちゃんは赤と、地面が違う色に光っていた。それを見てBちゃんは、「きれいだねー」と言う。
- そこに、DちゃんやEちゃんも集まってきた。保育者は、このきれいな影への子どもたちの興味・関心を受け止め、保育室近くにあるスロープに光のトンネルを作ろうと考えた。カラーポリロールを支柱の上に付け、いろいろな色のトンネルの屋根を作っていくと、地面がいろいろな色に変わっていった。その下を子どもたちが三輪車でくぐったり、中にもぐったりして楽しんでいる。
- 近くでその影を不思議そうに見るDちゃんは、「水をかけたら地面の色が消えるのではないかな？」と考えたようで、ジョーロに水を汲み、地面におもむろに水をかけ始めた。「あれっ、消えないー」と、Dちゃんの予想は外れたが、その後も何度も水をかけて試していた。
- その様子を見たFちゃんが、水をカラーポリロールの上からかけ「シャワー」と、言ったり、Eちゃんも水をパシャパシャかけたりを楽しむなど、遊びが広がっていった。
- 弁当前、保育室に戻ってきて、保育者が、『いろいろバス』の絵本を読んだ。いろいろなものがバスに乗ったり降りたりする話の中で、黒いバスが出てくるところで、「ひっそり影が乗りました」という場面があった。
- GちゃんやHちゃんは、「影ってなあに？」と言う。その場で保育者は咄嗟に、「みんなの下にあるやつだよ」と言う。すると子どもたちは、「影、知ってる！」「影、知らない」と言い始め、みんなで園庭に出ることになった。保育者が「これが影だよ」と、子どもたちの背中の後ろに伸びる影を指さして言う。子どもたちは、「おー影！」と不思議そうに眺め、Hちゃんは、しばらく驚いてジッとしていた。



いろいろバス
作：tupera tupera
発行：大日本図書

- ・ 保育者は、降園前に、『あおくときいろちゃん』の絵本を読んだ。Eちゃんは、絵本を見ながら、「分かった！青と黄色を混ぜれば緑になるんだ！」と興奮しながら見ていた。
- ・ 翌日、AちゃんとIちゃんは、この日もマントを付け走っていた。Iちゃんは、水色のマントを付けていたが、影を見て「（水色は）色が無い」と、言う。
- ・ この時Aちゃんは、黄色のマントを付けていた。Iちゃんは、「こっち（Aのものは）黄色い」と、うらやましそうに見ている。
- ・ 「本当だAちゃんのは黄色い」と、Aちゃんも見ている。保育者が、「本当だね、Iちゃんの水色は水色に見えないね」と言うと、Iちゃんは、「マント、青に変えたい」と言い、取りに行った。しかし、マントを取りに行くと、青がなかったので、「赤でいい」と言う。水色から赤にマントを付け替えると、「今度は赤い」と嬉しそうに走っていた。
- ・ Aちゃんは、「青君と黄色ちゃんみたい」と言う。保育者は、「本当だね。Iちゃん赤だから、赤ちゃんと黄色君だね」と、言うと、Aちゃんは、マントの色を重ねようとする。昨日読んだ『あおくときいろちゃん』の内容である青と黄色の色が重なって緑になるという内容を思い出した様子だった。
- ・ AちゃんとIちゃんでもマントを重ねてみるも、背中に付けたマントは、全く見えない。保育者も、2人のマントを持ち重ねてみたが、うまくいかなかった。
- ・ その後Iちゃんは、他のことに関心が向き、違う所に行ってしまった。Aちゃんと保育者は、近くにGちゃんが青いマントを付けているのを発見する。そして、Aちゃんが「あっ、青君いた！」と、Gちゃんのもとに近づく。Gちゃんに、保育者が訳を伝えると、「いいよ」と重ねていいことになった。
- ・ Aちゃんは、「青君と黄色君だ」と、重ねる前から興奮気味に言っている。マントを重ねてみると、ほんのり緑色が地面に映る。「すごい、緑色になっている！」と保育者が驚くと、AちゃんもGちゃんも「緑色だ！」と、驚いていた。



あおくときいろちゃん
Lionni, Leo (著)
藤田 圭雄 (訳)
発行：至光社



● 振り返って

スーパーマンになりきっていた頃の子どもたちは、同じような物を身につけて走り回り、周りにいる子どもたちと一緒に居ることを心地良く感じていた。

色の影を見つけた時は、保育者自身も「すごいな、きれいだな」と、子どもと共に感動する体験を味わった。子どもたちの興味や発見をもっと広げられないだろうかと思いついた保育者は、「トンネルのようにし、その下を色の影がよく見えるようにしたら楽しめるのでは」とひらめき、環境を構成した。そこで、子どもたちは、色や影の遊びを楽しみ、興味を広げていった。

影が水で消えると思ったDちゃんの姿や、影を発見したGちゃんやHちゃん、色の重なりを試してみようとしたAちゃんなど、一人一人が自分なりに面白がったり、周りに影響されたりしながら、心を揺らし、考えたり試したりする姿が捉えられた。

自然の事象や現象と関わり、遊びを楽しむ中で、今まで知らなかったことや不思議なことと出会い、絵本などからも興味・関心を広げている。事例の姿のように、影と色、色と色、影と水などに関わる一つ一つの体験が重ねられることで、子ども自身、次第にものごとを関連づけて考えたり、遊びに取り入れたりして、学びを深めていくのではないかとと思われる。